令和５年度　千葉県高等学校総合体育大会　サッカーの部　総評

【はじめに】

令和５年６月 10 日（土）、11 日（日）、15 日（木）、18 日（日）の日程で千葉県高等学校総合体育大会サッカーの部が行われた。先に行われた一次トーナメントの結果を踏まえ、16 チームが全国総体千葉県代表の１枠をかけてトーナメント方式で試合を行った。

ベスト４進出校は流経大柏、千葉明徳、八千代、市立船橋の４校で、準決勝が柏の葉総合運動公園と岩名運動公園、決勝が柏の葉総合運動公園にて行われ、優勝が市立船橋、準優勝が流経大柏という結果にて令和５年度千葉県総体の幕が閉じた。優勝した市立船橋は令和５年７月 29 日（土）から北海道にて行われる『翔び立て若き翼　北海道 2023』に出場する。

２年連続 30 回目の全国総体出場となった市立船橋は、FW⑮久保原の得点力、攻撃参加も魅力的な LSB③内川、DF④宮川、DF⑤五耒は高さと対人の強さを兼ね備えており、主将の MF⑦太田の展開力が光った。また、途中出場の MF⑯峯野は小柄ながら球際に強く献身的なプレーで相手の攻撃の芽を摘んだ。中でも、FW⑩郡司の得点感覚は目を見張るものがあり、スピードを活かした裏抜けや、緩急のあるドリブル、ロングスローで相手の脅威となり続け、ここぞという場面で決定的なプレーが出来る稀有な選手であった。

【今大会を振り返って】

今大会の決勝トーナメント進出 16 校は、公立５校・私立 11 校であり、所属リーグとしてはプレミア２校・１部４校・２部５校・３部５校であった。昨年度選手権ベスト８であった日体大柏が東海大浦安に敗れるなど、１部リーグ勢に対しての番狂わせの目立つ大会となった。

準決勝は流経大柏対千葉明徳、市立船橋対八千代で、関東大会に出場した八千代と千葉明徳がシードを守り準決勝に進出するも、プレミアリーグ出場の２校に力の差を見せられる結果となった。

千葉県は現在、プレミアリーグ EAST に３チーム出場しており、全国トップである。また、高体連チームから２チームの出場は千葉県のみであることから、千葉県の頂点に立つことは容易ではない。しかしながら、昨年度は日体大柏が選手権ベスト８と奮闘したものの、千葉県は H30 年度以降全国ベスト４以上の成績を収められていないことに危機感を感じざるを得ない。（流経大柏：H29 総体優勝、H30 選手権準優勝／市立船橋：Ｈ３０総体第３位）

準決勝・決勝の３試合では合計 14 得点である。（市立船橋８得点、流経大柏５点、八千代１点）市立船橋の郡司のような個で打開できる想像力あふれる選手が現れたことは千葉県サッカー界においても喜ばしいことであるものの、失点のシチュエーションを振り返ると課題が見えてきた。セットプレーの守備やＧＫとの連携したクロス対応、ロングスロー対策は課題であったように思える。ヘディングの高さやトランジションとプレスの数などのフィジカルスタンダードやインテンシティの高さは目を見張るが、そのプレスに対してリスクを負わずにロングボールで回避してしまい、判断なく自らボールロストしてしまうことも多く見受けられた。ロングボール一発で裏を取られたり、クリアミスから２次攻撃を許してしまったり、スピードに乗った攻撃に対しての対応が悪く、結果的にスピードのある選手に簡単に得点を奪われてしまうことがあった。日々のトレーニングにおいて指導者が選手たちにゲームのリアリティを求め、良い判断とは何か言語化できるようにすることで、守備のレベルを上げ、攻撃のレベルを上げ

なければならない（その逆もしかりであるが）状況を作ることが求められると考える。

【大会運営について】

今大会は、6月3日（土）に予定していたラウンド32が台風により翌日に順延となり、急遽6月6日（火）の平日に学校外グランド開催した。平日の開催となり、本来は派遣役員を公務の都合上変更せざるを得ない状況となってしまった。しかしながら、準決勝を6月15日（祝木）県民の日に行うことで、決勝を中2日で行えたこともあり、両チームは強度の高いゲームを行うことが出来た。

声出し応援の再開はピッチに立つ選手のエネルギーとなり、気迫溢れる試合展開が観戦者の中で開催できたことが何よりであった。今大会を無事に終えられたこと、また大会の運営に携わっていただいた全ての方々に感謝の意を表すとともに、優勝した市立船橋高校の全国総体での躍進を期待し、令和5年度千葉県高等学校総合体育大会サッカーの部の総評とさせていただく。

千葉経済大学附属高等学校　奥寺　亮介